

飼育期間中のアユの成長差がもたらす友釣り釣果の違い

片岡佳孝・西森克浩

◆背景・目的

全国的な冷水病の蔓延に伴い、河川放流用種苗としての琵琶湖産アユ種苗のシェアは低下している。しかし、同種苗に対する潜在的な需要は大きい。そこで、そのシェアの回復を図るため、飼育集団から一層河川放流に適した種苗を選抜する技術を検討した。

◆成果の内容・特徴

- 琵琶湖でエリ網漁によって2004年4月12日に漁獲されたアユを同年6月3日まで飼育した。その後、成長の良否により大中小の3群に選別し、「選別大」と「選別中」を翌6月4日に永源寺ダム上流の愛知川に放流した。なお、最も成長が悪い「選別小」は放流に適さないと判断した。
- 放流尾数は、「選別大」が9,688尾（体重7.5g）、「選別中」が9,061尾（同5.1g）、合計18,794尾であった。
- 漁期間中にびくのぞきで確認された釣獲魚（334尾）の内訳は、「選別大」が75%で「選別中」の25%を大きく上回った（図1）。
- 日数が経過するに伴い「選別中」の占める割合が増加する傾向が認められた（図2）。
- 6月4日に平均体長83mmで放流された「選別大」は、7月中旬には同133mmまで成長した。また、同75mmで放流された「選別中」は8月中旬でも130mmに留まり、漁期全般を通じて「選別大」の方が釣獲されたサイズが大きかった。

◆成果の活用・留意点

- 成長の良い群が釣果が良好であることが分かった。しかし、今回の試験では、放流時のサイズが異なっていたため、放流時体型をそろえた上でさらに放流試験を行う必要がある。

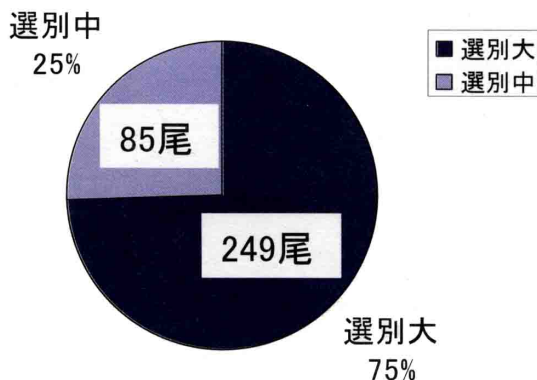


図1 漁期間中の釣獲アユの内訳

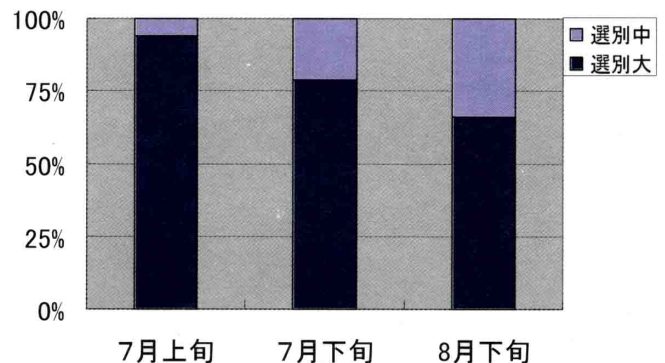


図2 釣獲アユの内訳の経時変化